

## 語学教育放送と連動する学習支援サイト

### 1T-3 ラジオ英語放送とWebサイト『英語征服』の運用—

新井 宏征 石井 康毅

東京外国語大学大学院 地域文化研究科

#### 1 はじめに

著者(新井)は、1999年4月からNHKラジオの語学番組『やさしいビジネス英語』と連動する学習支援サイト『英語征服』<sup>1</sup>を運用している。このWebサイトでは、(1)番組に関する学習素材集の提供、(2)語彙や例文を問題形式で復習するメールマガジンの配信、(3)利用者同士の情報交換を促進するメーリングリストの運営を主なサービスとしている(図1)。

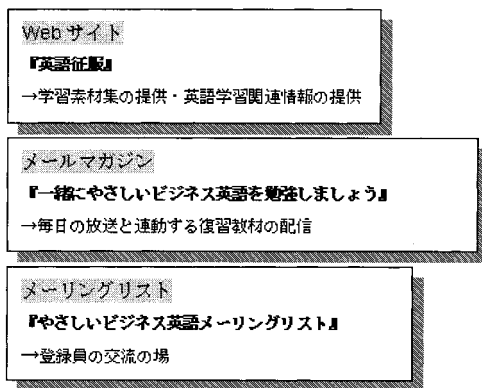


図1: サービス概要

経済社会構造のグローバル化の進展による「英語ブーム」[1][2]、e-Learningと呼ばれるコンピュータを活用した教育システムの隆盛[3][4]、そしてサービスが無料であることもあって、1日の平均訪問者数は200~300、メールマガジンの登録者数は8000人を越える規模である。利用者各自の生活時間に合わせて補助学習ができることがポイントである[5]。

本稿は、試行錯誤的に立ち上げた学習支援サイトの運用の問題点を扱う。Webサイトの運用上の問題とメールマガジンの配信上の問題を、これまでのWebサイトの運用経験から明らかにし、問題発生の原因を探ると同時に改善の仕組みを提案する。改善の技術的な取り組みについては1T-02「語学教育放送と連動する学習支援サイト-Webサイト『英語征服』の運用の自動化-」を参照されたい。

Educational Programming Broadcasts and Their Supplemental Web Sites-A Radio English Program and Management of Its Supplemental Site-  
Hiroyuki ARAI, Yasutake ISHII  
Graduate School of Area and Culture Studies, Tokyo University of Foreign Studies,  
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, JAPAN

<sup>1</sup>http://www.eigomaster.com/

#### 2 従来の運用体制

##### 2.1 語学教育放送との連動

毎年多くの語学学習者がラジオやテレビの語学教育放送を利用している。これらの語学教育放送の利点としては、「安価に利用できる」「毎日放送しているので学習のペースメーカーになる」などが挙げられる。しかしその反面、「挫折しやすい」「学習の到達度が把握しにくい」などの欠点も挙げられる。強制的に予習・復習をする必要があるわけではなく、添削の課題があるわけでもない。したがって学習者が語学教育放送を聞き続けるためには、何らかの強制力が必要である。

著者らのWebサイトの基本的なコンセプトは、「語学教育放送の学習支援」[6]である。学習者に次の方法で学習継続の強制力を維持させる。

- 毎日の放送と連動した内容のメールマガジンをその日のうちに配信することで、毎日放送を聞くという強制力を与える。
- マガジンのコンテンツを問題形式にすることで、各自で放送の理解度・習熟度を確認できるよう試みている。

このように実際の語学教育放送と連動することで、語学教育放送の欠点を学習者の視点から克服する。

以下、この学習支援の中心であるWebサイトとメールマガジン、そしてメーリングリストについて詳説する。

##### 2.2 Webサイト『英語征服』

英語学習支援サイト『英語征服』は開設して以来、15万ヒットを超え、1日あたりの平均的な訪問者数は200から300程度となっている<sup>2</sup>。

主なコンテンツとしてNHKラジオの語学番組『やさしいビジネス英語』を据え、そのほかに参考書の紹介や、学習者同士が集まる英語勉強会の紹介などを行っている。また、テキストに出てきた単語をまとめた『やさし単語帳』などもある。

##### 2.3 メールマガジン『一緒にやさしビジ』

メールマガジン『一緒にやさしいビジネス英語を勉強しましょう』(図2)(以下、『一緒にやさしビジ』)は、Webサイト『英語征服』、メーリングリストと連動する形で、Webサイト開設と同時期の1999年4月に創刊した。

『やさしいビジネス英語』とは、NHKのラジオ英語講座の中で最もレベルの高い講座である。ビジネス英語といっても、電話の応対や会議で使うような英語表現を学ぶのではなく、実際にビジネスパーソンによって交わされるであろう様々な最新の話題を取り上げ、それらの背景知識とともに、英語の知識も学ぶことを目的としている。1日分のビニエット(スキット)は量が多く、使われている語彙も豊富で、そのレベルも高い。毎年度の放送は半年で完結し、後半の半年間は再放送として前期と同じ内容を放送する。

この放送に基づき、創刊当初のメールマガジンは、自らが放送を聞いて調べたことなどを公開するというメモ的な内容であった。年度の後半では、前述の通り再放送になるため、復

<sup>2</sup>2001年7月7日現在。

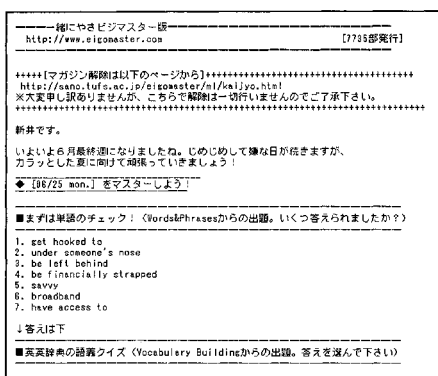


図 2: メールマガジン

習的な要素を盛り込もうと、単語などを確認できる問題形式にした。これが現在の形式の原型となっている。現在、月曜日から木曜日までの週4日間配信しており、読者数は総計8012人である<sup>3</sup>。

## 2.4 『やさビジメーリングリスト』

『やさビジメーリングリスト』は、サイトやメールマガジンの利用者同士の情報交換や交流を目的として開設された。現在、1217人の参加者がいる<sup>4</sup>。

メーリングリストでは、その目的どおり、参加者同士の情報交換が活発に行われている。著者は管理人として、何か問題があった場合のことを考え、メーリングリストへの投稿にはすべて目を通してしている。

## 3 メールマガジンの現状詳細

### 3.1 作成プロセス

Web、メールマガジン、メーリングリストのうちで作業負荷が大きいのはメールマガジンである。以下にその1日の作業プロセスを示す。

1. テキストの *Words and Phrases* から、その日の新出単語7個を選び、CSV形式で打ち込む。CSV形式にするのは、利用者がデータを任意に加工しやすくするためである。
2. テキストの *Vocabulary Building* から3つの表現を選んで、それらの単語を英英辞典 (Collins Cobuild English Dictionary) で調べ、その語義を書き写し、該当の単語部分を穴埋めにして問題にする。解答部分では、英英の部分だけでなく、その訳語もテキストを参照して掲載し、英英辞典の問題として出題しなかった単語と訳語も掲載する。
3. *Sentences* から2つの文を選んで、その訳文を問題として掲載。

### 3.2 作業負荷の検討

メールマガジン配信の際には以下の問題があった。

1. 複数の配信サービス(計6)から配信しているため、すべてのサイトにログインし、配信作業をするという手間がかかる。

2. 著者(新井)の生活スケジュールに合わせて配信しているため、配信時間が一定しない。

3. 語義の書き写しなどを手作業で行っている。

1については、複数の配信システムを利用することで多様な読者層を獲得することができたが、実際の配信作業を非常に煩雑なものにしている。配信システムの一元化による作業の効率化を現在検討している。2に関しては、利用者から配信時間を一定させて欲しいとの希望が多く、自動化が求められる。3については、電子化辞書を利用したい。

## 3.3 利用者サポート

利用者サポートは、バックナンバーの閲覧依頼やメールマガジンの購読解除依頼への対応などである。これらの中で最も依頼が多いのがメールマガジンの購読解除である。この問題に関しては、メールマガジンの一元化により管理が容易になると予想される。

## 3.4 プロセスの自動化

作業負荷を軽減するための自動化可能なプロセスを挙げる。

1. 配信システムの一元化
2. 配信データと配信システムのプログラム連携
3. 語義検索の自動化
4. メールマガジン利用者サポート

時間コストを削減することで、新出単語の選択、問題の作成に注力でき、言語知識の品質を向上させることができる。

## 4 展望—携帯端末向けサービスの充実

自動化のプロセスを通して削減された作業時間を利用して、携帯端末向けコンテンツを充実させたい。コンピュータ上で閲覧できるコンテンツと連動させながら、携帯端末向けならではの独自性を出していきたい。例えば、携帯電話のメール機能を利用して、携帯端末向けのWebページで出題した単語をシンプルな単語帳形式で復習用として配信することが考えられる。午前中には携帯端末向けのWebページを準備して学習者に利用してもらい、その日の夜に携帯端末に単語帳のメールを配信するというサイクルにより、出題される単語に自然に繰り返し触れることができる。単語の学習では、何度も繰り返すことが効果的だが、単調な繰り返しではすぐに飽きてしまい、なかなか覚えることはできない。そのため、このように様々な形で同じ単語を確認できるというのは、記憶を強化するのにふさわしい方法だと考えられる。

## 参考文献

- [1] 根本 孝: 『e-ラーニング 日本企業のオープン学習コミュニティ戦略』, 中央経済社, 2001.
- [2] 山崎 将志: 『eLearning 実践的スキルの習得技法』, ダイアモンド社, 2001.
- [3] 小宮智明・村尾浩二・郡千治: 『教育ソリューション「iBestSolutions/Learning」-E-Learning on BIGLOBE-』, NEC 技報, Vol53, No.8, pp.107-110, 2000.
- [4] 佐藤 修: 『ネットラーニング 事例に学ぶ 21 世紀の教育』, 中央経済社, 2001.
- [5] 山本 洋雄: e-Learning の"光"と"影"《市場化》への課題, コンピュータ&エデュケーション Vol.10 pp21-28 (2001).
- [6] 池田 央: e-Learning 構築のための設計モデル, コンピュータ&エデュケーション Vol.10 pp14-20 (2001).

<sup>3</sup>2001年7月7日現在。

<sup>4</sup>2001年7月7日現在。